

BCLA 国際会議 2016 に参加して

2016年7月12日～15日

於 ウルヴァーハンプトン大学

山田 美雪 (東京大学現代文芸論博士課程)

2016年7月12日から15日、英国ウルヴァーハンプトン大学にて開催されたイギリス比較文学会 (British Comparative Literature Association, BCLA) 第16回トリエンナーレ国際会議に参加した。

本会議は3年に一度催される同学会の国際大会で、2016年は“Salvage” (救済、海難救助、廃品利用) という全体テーマの下、25の分科会が設けられ、約80名の参加者による口頭発表、パネルディスカッション、ゲストの方々の基調講演が行われた。特に同年は、ウィリアム・シェイクスピアとミゲル・デ・セルバンテスの没後400年にあたることから、両作家に関連するプログラムが集中的に組まれていたのも特徴であった。

プログラム発表時より、特に魅力的だと感じたのは、主催者、報告者双方によるテーマの解釈の柔軟さ、多様性である。“Salvage” というキーワードをゆるやかな共通項としながらも、その多義性に託して各参加者によるユニークなアプローチが試みられ、報告の内容は実に多岐に及んでいた。

たとえば、テキストの発掘、古典の再演、シェイクスピア演劇の初演時のダンスの再現等、上演や出版における「再生」を扱ったもの。翻訳、アダプテーション、パロディ、モチーフの利用のように、一つのテキストに新たな命を与える手法について取り上げたもの。マイナー文学における言語的アイデンティティの回復、民族や個人の記憶の掘り起こしと伝承等の問題に取り組んだもの。個々の作品に即して、登場人物の救済や、ごみやリサイクルの表象に着目したもの等々、マクロの視点、ミクロの視点双方から、文芸と「救済」について考察しうる刺激的な場となっていた。

私が参加したのは、2日目に開催された「異文化間のアイデンティティ1：空間」という分科会である。報告者は3名で、拙稿の他に、アイルランドの詩人デレク・マホンとドイツの詩人ザラ・キルシュの詩における“Edgeland” という境界的場について論じた報告と、カナダの詩人ジャン・コンにおける移動のありようについて、コンがモチーフとして取り入れる他の紀行作家や画家らの作品を参照しながら検証した報告があった。共に、場所の感覚や移動を巡って、様々な事例に汎用可能と思われる視点や概念が紹介されており、大変示唆深い内容だった。拙稿「サンクチュアリを求めて：世界の裏側から夢想されるブエノスアイレス」では、世紀転換期の日本と香港の小説、戯曲、映像作品において、現実／架空のブエノスアイレスへの渡航体験が、登場人物のアイデンティティ探求と救いのプロ

セスにどのように結びついているか検証を試みた。特にまだ英語圏での紹介が進んでいない作品についてどのような反応をいただくか、緊張をおぼえながらの発表であった。司会者、出席者の方々からは、内容へのご意見と共に、ある場所のクリシェ的なイメージを扱った作品を取り上げる際に留意すべき点という、今後自分が研究やアウトプットを行うに当たり常に念頭に置かなければならないご指摘をいただいた。発表の形式についての反省点も含め、今後活かしたいと思う。

その他、聴講できた範囲では、記憶と過去を掬い、未来を救うという、文学の可能性に着目した報告群に特に惹かれた。ハンガリーの作家による第二次世界大戦のトラウマの表象を扱った報告、亡命先の国における母国語創作がテーマの博士課程学生による論文構想は、自分が今年取り組んできたアルゼンチンの作家の道のりに照らしても共感するところ、学ぶところが沢山あった。また、ウェールズ地方の言語と創作に特化したグループ等、この学会ならではの分科会もあり、興味深く拝聴した。

先述のように、会期を通じて、多様な視点から文学における／文学を通じた救済や再生という概念が追求されており、様々なお話に触れるうち、作家－作品－研究者の関係そのものに思いが至った。作家が様々な形で残した作品を取り上げ、先達の研究者たちの文章を糧に、言葉によって新たな見方を提示する、批評行為や文芸研究という営みも、“Salvage”と言える／たり得る可能性を持った営みなのではないか。そう考えさせられた4日間であった。

私は海外で開催される学会に参加するのはこれがほぼ初めてであり、正直なところ、ウルヴァーハンプトンへの途上から自分の発表が終わるまで、とても他の参加者との交流を楽しむ気持ちの余裕は持てなかったのだが、各日の休憩時間や会期終了後のフィールドトリップを通じて、ささやかながら周囲の人と知己を得ることができた。南米出身の研究者に自分のテーマについてお話する機会が持てたのは大変ありがたく、また同じアジア出身の大学院生や若手の先生からイギリス留学事情について伺えたのは、各国の参加者が集まる場ならではの貴重な経験であったと思う。

また、いわゆる座学以外のプログラムについても付記しておきたい。会期3日目には、会場近くの小劇場にて、プロの俳優と地元ウルヴァーハンプトンの若者たちによるパフォーマンスが上演された。大会の趣旨に合わせて考案されたこの劇は、全台詞が既存の戯曲の一節をパラフレーズして編まれ、小道具はごみ置き場に捨てられていた廃品を再利用して作られたという、まさに“Salvage”を体現する内容であった。ある会議の参加者のためだけに劇を一つ創作してしまうというそのホスピタリティに感銘を受けると共に、徹底して会議のテーマに沿った企画が練られていること、また、学術的な会ではあるが、総合的なイベントとして参加者が楽しめるよう熟慮されている点も非常に印象的であった。なお、希望者対象のフィールドトリップも、シェイクスピア生誕の地ストラットフォード・アポン・エイヴォンを訪れるものだった。

会議の運営委員会の先生方や、ウルヴァーハンプトン大学の学生の皆さまには、滞在に係る諸事項についても丁寧に教えていただいた他、大学の寮に宿泊できたことも大変ありがたかった。もし自分がこのような会にゲストをお迎えする機会があれば、見習いたいと思うことが多くあり、感謝申し上げたい。

なお、学会終了後、研究テーマに係る調査のために数日間ロンドンに滞在した。その間に、昨夏、現代文芸論研究室が協力機関であるワークショップ“*Institute for World Literature*”にて知り合った、現地在住の友人に再会することができた。約一年を経て懐かしい参加者たちの近況や活躍を聞き、自分の12カ月も振り返りつつ、嬉しさや焦りなど色々な感情がこみ上げた。様々な、そして劇的に変動しつつある各国の環境下で、それぞれの研究課題に向き合っている仲間がいるということであらためて心強く感じ、背筋の伸びる思いがしたひと時であった。